

9 学習言語

「学習言語」という用語はまだあまり聞きなれないことばかもしれない。しかし、第二言語習得研究や言語教育の分野では最近その研究の重要性が高まっている。なぜなら、学習言語を身につけることは、児童生徒が学校での学習内容を理解し十分な学力を身につける上で極めて大切だと考えられているからだ。学習言語とは、一口に言ってしまえば、学校の教育現場で使用される言語のことであり、教科学習に必要な言語能力ともいえる。言語学では、コンテクスト（文脈）による言語使用の変種を「レジスター（言語使用域）」というが、学習言語もレジスターの一つと考えることもできるかもしれない。

学習言語のとらえ方には、色々なアプローチがあるが、学習言語という概念を最初に広めたのはCumminsである。Cumminsは、言語能力を、**伝達言語能力 (Basic Interpersonal Communicative Skills, BICS)** と**認知学習言語能力 (Cognitive Academic Language Proficiency, CALP)** の二つに分け、前者は、日常生活における会話を中心とした基礎的な伝達を行う言語能力、後者は、学校の教科学習を行うのに必要な認知活動を中心とした言語能力と定義した。この言語能力を二分化した初期の概念モデルでは、BICSは母語話者であれば誰でも身につけることができる生得的な言語能力であり、就学前に習得が完了し、学校では教える必要のない言語能力だと考えられた。一方、CALPは就学期間中に時間をかけて習得される言語能力であり、習得に個人差が生じるととらえられていた (Cummins, 1979, 1984, 2000)。

Cumminsの学習言語をこのような二分化法でとらえるアプローチについては、言語習得のプロセスを単純化し固定的にとらえ過ぎていると批判されることもあるが、Cumminsがこのようなアプローチを主張した背景には、移民先進国のアメリカにおいて英語の非母語話者に対する言語教育の支援が十分でない状況を教育関係者に訴える狙いがあったという。移民大国のアメリカでは、英語を母語としない児童生徒が多数就学している。彼らは普通入国後数年で日常会話で不自由しない程度の会話力を身につけるが、教科学習では困難に直面することが少なくない。Cumminsはこれは彼らが教科学習に必要な言語能力をまだ十分に身につけていないことによるものであり、会話力の熟達度と教科学習に必要な英語の熟達度は区別する必要があると考えた。アメリカでは英語の非母語話者には言語のサポートが行われるが、十分な英語力が身についていると判断されれば支援は無くなる。Cumminsは英語の熟達度を判断する際、表面的な会話力だけで熟達度の程

度を判断すべきではないことをこのモデルを基に教育関係者に訴えたといえる (Cummins, 2000)。

Cumminsは、その後このモデルを修正したが、修正したモデルでは、BISCと CALPに代わり、**会話的言語力 (Conversational Language Proficiency)** と**アカデミック言語力 (Academic Language Proficiency)** という用語を用いている (Cummins, 1984)。このモデルでは、「認知力必要度」と「場面依存度」という2つの基準を基に、言語活動は次の4つのタイプに分類される：認知力必要度は低く場面依存度が高いAタイプ、認知力必要度も場面依存度も高いBタイプ、認知依存度と場面依存度がともに低いCタイプ、認知力依存度は高いが場面依存度は低いDタイプ。日常会話などは、比較的認知力必要度が低く、また言語以外の情報が豊富にあるので場面依存度は高いと考えられ、Aタイプの言語活動に分類される。一方、教科学習は、活発な思考活動が求められるので認知力必要度は高く、言語そのものの依存度が高くなるため場面依存度は低くなり、Dタイプの言語活動に分類されると、Cumminsは主張した。しかし、会話のような言語活動でも認知力必要度が高まる状況はあり得るし、「認知力必要度」の程度は場面や個人によっても異なるため、絶対的なものではなく、言語活動をこの2つの指標を基に固定的にとらえることへの問題点などが指摘された。また、Cumminsの主張した会話的言語力とアカデミック言語力を構成する要素が不明瞭である点も問題視された。

Cumminsのモデルでは学習言語の構成要素が明確に示されなかったが、Scarcella (2003) はこれを具体的に説明することを試みた。Scarcellaによれば、学習言語は (1) 言語的側面、(2) 認知的側面、(3) 社会文化・心理的側面の3つの側面から成る。また、(1) 言語的側面は、音韻、語彙、文法、社会言語、談話、(2) 認知的側面は、知識、高次の思考、ストラテジー、メタ言語認識、(3) 社会文化・心理的側面は、規範、価値観、信条、態度・意欲・関心、行動・実践・習慣、のようにより細分化された要素から構成されている。Scarcellaの学習言語では、言語的側面に加え、認知的側面、社会文化・心理的側面も含まれ、これらの側面は互いに深く関わっていると考えられている。

学習言語は、教科学習で求められる会話力も含めた言語能力であり、教科学習の習熟度と深く関わると考えられている。また、学習言語に問題がある児童生徒は非母語話者に限らず、一部の母語話者も含まれるとも言われている。日本での学習言語の研究はまだ始まったばかりであり、グローバル化が進む中、今後更なる調査・研究が期待される。

(渋谷 和郎)